るのだと。けれどもそれはたゞ言葉である。言葉の上の理窟である。實際は決してさうではない。群集としての人間と個人としての人間とは全然違つて居る。自覺の淺い人には社會は個人の集りだと思はれて居るが、事實は決してさうではない。社會は社會として發達をつゞけ、個人は寧ろその無意味なる力の下に常にそれに引きづられ、踏みにぢられて居るのである。人類全體としての人間の盲目なる自然力は、寧ろ常に個人としての人間の要求を虐げて居るのである。

日本の人はよく現代に於て人情の薄弱になつた事を嘆ずる。けれどもさう云ふ事を嘆ずる人達が既に一方に於て社會とか人類とか云ふものゝ偉大なる暴力に屈從して居るのである。人情は個人のもの

である。個人と個人との接觸に於て初めて見る事の出來るものである。決して盲目的な人類全體や今日の所謂社會的組織に屬するのでない。抽象的な科學上の原理のみによつて營まれて行く社會には、人情などの必要はないわけである。

＊＊＊

かう云ふ風に云つて來ると、世の所謂宗教家達は「そこにこそ宗教の使命があるのだ」と云つて喜ぶかも知れない。併し今日の如何なる宗教が人類の一般善とか、高尚なる人類の目的とか[illegible]ふ觀念と全く離れて存在し得るか。どこに個人と個人との僞らざる接觸によつてのみ成り立つ宗教があるか。宇宙の神を說いたり、全體として

の人類の目的を説いたりする事に絶對の權威を置かうとする宗教が、どうして今日の吾々の此の不滿を救つてくれる事が出來やう。貧民に物を與へるやうな事を善行と思つたり、死んだローマンスの中の救世主を人間扱ひする事位を新らしい信仰と思つて喜んで居るやうな宗教にどうして吾々の現在のこの苦悶を救ふ事が出來やう。凡ては矢張盲目的な自然の奴隷、意地惡き自然力の復讐に對する屈從者にしか過ぎないのだ。吾々の求むるところのものは、そんな欺かれた安心ではない。

＊＊＊

○人類の幸福――一般善――現在に於て吾々の最も惜むべきものは

それだ。吾々はその名の爲めに今や最も怖ろしい自然の復讐を受けつゝあるのだ。吾々は自己の創造した世界を何故自己のものとして自由に享樂する事が出來ないだらう。何故吾々は個々の人間の生存の爭ひをばかり苦に病まなければならなかつたのだらう。そして却てその爲めに今日のやうな虛僞な世界を造り出さなければならなかつたのだらう。

一體個人々々の生存の爭ひは、それ程怖ろしいものなのだらうか。人類の一般善、全體としての人類の生存と云ふ事の爲めに、個人の要求を蹂躙すると云ふ事と、それとどちらが吾々にとつて望ましい事だらうか。何故吾々は個人の生活を個人にまかして置く事が出來

なかつたのだらうか。

＊＊＊

吾々は今や此の自然の復讐的意志によつてあやまり造らせられた世界的運行に向つて、何等かの大膽なる反抗を企てなければならなくなつた。何等かの大膽なる飛躍によつて、此の吾々の造つた世界を自然の暴力的誘惑から引き離さなければならなくなつた。

＊＊＊

何よりも先づ吾々は個人々々の生存の戰ひを怖れない人と人との接觸を要求する。自然意志に欺かれない自我と自我との接觸を要求するのである。

＊＊＊

合理的團體主義に對する主我的個人主義の爭鬪が近代の思想史上如何に激甚なる紛亂を演じ來つたかは、今更云ふまでもない事である。併し吾々は今や本當にその爭鬪の根本まで探り入つて、眞に吾々自身の中心要求の意義を自覺しなければならなくなつたのではないか。而してそこにこれまでの人々の主張した以上に明らかな自覺と强固なる信念と奮鬪的な努力とを以て、積極的な絶對的な新個人主義を樹立しなければならなくなつて居るのではないか。

＊＊＊

吾々は前に近代の歴史は解放の歴史であると云つた。科學の進歩、

工業の發達、機械の進歩――これみな人類が自然界物質界を理解し、之れを利用し、之れを支配し、之れを使役して以て、自己の自由なる發展を得んとする欲求の現はれでなければならぬ。更にそれと共に人類はそれの思想上の發展によつて、神から自由になり、あらゆる外的權威から自由になり、眞に自我本位の生活を營まうとする努力をつゞけて來た。しかも、過去に於けるその實際上の結果はどうであつたかと云ふに、それは實に悲しむべき物質力の勝利に歸してしまつた。物質を支配しようとしながら、却て物質に支配されてしまつた。近世商業主義の國家組織は一體何を意味するか。產業本位資本家本位の近世社會は一體何を意味するか。その初め人間本位の精

神を以て勃興しながらも、いつしか物質主義の囚ふるところとなり、多數投票をたのんで事をしようとするやうな外的機械的方針に沒頭するやうになた近世社會主義の運動は一體何を意味するか。悉くこれ物質力の勝利であり、內的勢力に對する外的勢力の勝利ではないか。而もかくの如き外的運動が、或は人類の幸福の爲めと云ひ、或は社會の進步と云ひ、或は正義と云ひ、或は人道と云ひ、或は自由と云ひ、或は平民主義と云ふ如き抽象的な妥協的な曖昧な意味の美名の下に、ます〳〵橫暴を逞しうしつゝあるのは十九世紀から二十世紀へかけての大勢ではなかつたか。

けれども今はもうそんな道理や義務にだまされて居る時代ではな

い。今こそ本當に個人があらゆる束縛から解放されなければならぬ時である。自我が絶對になつて、歩み出さねばならぬ時である。

＊＊＊

最近日本の讀書界で持囃されて居る印度の詩人タゴールは、其の著『生の實現』の中で、ヨーロッパの個人主義は內の我と外の我とを分裂させたところから起つて來たやうに云つて居る。いかにもその通りである。けれどもそれは決してそこにとゞまるものではない。それは「曾て自覺なくして實現せられたのより一層完全な自覺的統一を得る階段」（カアペンター）に外ならぬのである。本當の自我主義、絶對的な自我主義――それが今起りつゝあるのである。

エドワード・カアペンタアは云ふ。

『現在はたゞ一切の外的階級政治の最終局的拒否の時期である。內發眞實なる權威回復の準備である。此の時期に於て文明の仕事は終末に歸する。凡そ數世紀間の希望と目的とは實現される。人類が經過し來つた所の苦き經驗は完く了る。而して此の死、及び此の死に伴ふあらゆる苦悶と不安より、つひに『復活』が來るのである。人類は自己の神聖なる必要から離れることの底を探つた。苦悶の杯の糟を嘗めた。慥かに地獄に落ちた。が、それから振返つた、個人主義に社會的に。而して曾て失つた統一に向つて意識的な努力を以て再び興起する。而して虛僞なる民主

政は排除せられて、之れに次ぐべき眞正の民主政――それは決して外發的にあらずして內發的支配である――各單位のうちに於ける綜合的の支配である――が開展される』（カアペンタア『文明、それの原因及び救治』）

と。彼は更に云ふ。

『吾人は今や人類の歷史の一大頂點に近づきつゝある。吾人は人類が殆んど眞正なる「人生」の解釋に向上すべき一時期、「表現」の爲めに物質を征服するの一時期に到達しつゝある。從來はそれが不可能であつた。從來は生存の焦慮苦悶が社會を支配して居つて、民衆は有効なる自我表現につとむる暇がなかつた。

彼等は唯物質の奴隷であつた。……けれども今や機械力の驚くべき發達を以て、つひに人類は久しきその地上の束縛から解放され、而して人間が眞正なる生活に高上し得る「人間の翼」を得ねばならぬ』（「天使の翼」）

と。此のカアペンタアの所謂眞正なる自我表現の生活とは何を意味するのであるか。吾々はそれを今や眞に考ふべき時に到つて居る。

＊＊＊

いふところの人間解放――文明――の眞意義の自覺、吾々の謂ふ個人主義の精髓はそこになければならぬ。

個人主義思潮　完

大正四年四月十八日印刷
大正四年四月二十日發行

定價五十錢

著者　相馬昌治
東京市牛込區西五軒町三十五番地

發行者　中村一六
東京市神田區西小川町二丁目六番地

印刷者　篠田玉三

不許複製

發行所　東京市牛込區西五軒町廿五番地　天弦堂書房

—四版發賣—

■木村莊八氏新著■高評如湧■

近代思潮叢書 第四篇

未來派及立體派の藝術

代表的挿繪十數葉
二百五十餘頁
定價金五十錢
郵送料金六錢

既すにせよ賞めるにせよ未來派立體派と呼聲は此二三年來中々高いが、是非は兎も角一體如何云ふ思想主張の下に從事してゐる畫家の集團かと思ふ場合、我々は何時も手近にその質疑をはつきりと解くに足る書の無いことを遺憾として來た。その要求に副ふて生れたものが本書である。只生れただけの間に合せか、乃至は立派に役目を果す待たれたものかは、著者の名と特に之れを書いた態度とを見ただけでも解る筈だ。著者は之れを待つ人の意のある所を含んで、只管忠實な紹介者の態度を守つた。即ち多くの人の知識慾を調訂する雇醫師たらんと試みた。洋書を探してもかゝる書は未だ求められない。元より十數枚代表的作品の寫眞版が入られてある。

東京市牛込區五軒町四十五番
天弦堂書房
振替口座東京九五五番貳

71
482

終